

明日をひらく地域活性化のための情報誌

地域づくり

2015

4

ISSN 1340-8917



特集 ■ 青少年の芸術文化活動の拠点づくり

本誌は、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです



特集

青少年の芸術文化活動の拠点づくり

4	基調論文 青少年の創造性を汲み上げる拠点づくり	加藤種男（公益社団法人企業メセナ協議会専務理事）
8	北海道東川町 「出会いと交流」を理念に写真甲子園	大角 猛
10	青森県弘前市 ファッションが育てる「人」と「夢」	高橋直美
12	山形県山形市 社会や暮らしの問題、高校生が解決策を提案	樋口雅子
14	福島県いわき市 いわきの風土から生まれた「フラガールズ甲子園」	蛭田光一
16	新潟県佐渡市 「はなが甲子園」で佐渡を活性化	大桃一浩
18	大阪府堺市 全国の中学校美術部の作品が一堂に	青木祐輔
20	京都府京都市 いけばなを通して心の教育を推進	一般財団法人 池坊華道会
22	岡山県倉敷市 大山名人生誕の地で小学生が熱戦	加藤靖之
24	広島県安芸高田市 全国の高校生が「神楽の祭典」に集結	戸田邦昭
26	愛媛県松山市 「ことばの力」信じ、心豊かな人間育てる	日野裕士
28	愛媛県四国中央市 新たな書表現、「書道パフォーマンス甲子園」	眞鍋幸雅
30	高知県 「まんがサークル日本一」目指し、高校生が熱闘	中野智太
32	宮崎県日向市 こども落語全国大会で地域を元気に	黒木隆文

レギュラーレポート

- 34 **トピックス** 株式会社サイネックス
地域行政情報誌「わが街事典」を発行 塩野 勝
- 36 **地域パンフレット創造セミナー**
魅力あるパンフレットづくりをテーマに
- 37 **自治体アンテナショップ報告書を発行**
地域づくり団体探訪 香川県直島町
- 38 **香川大学直島地域活性化プロジェクト**
島の活性化へ、大学生が古民家カフェを経営
- 40 **センター通信**

- 44 **平成 26 年度地方創生フォーラム**
森から始める地域の再生
首長の思い
- 46 **世界遺産を地域から世界へ**
真砂充敏（和歌山県田辺市長）

グラビア

- 2 **青少年の芸術文化活動の拠点づくり**
- 41 **第 19 回ふるさとイベント大賞**
- 47 **都道府県漫遊** 【富山県】
- 48 **手前みそですが…** 【山形県米沢市】



満開の桜並木を走る観光馬車

悠々と流れる北上川の河畔にある北上展勝地は、東北有数の桜の名所として知られ、青森県弘前市、秋田県仙北市とともに「みちのく三大桜名所」に数えられています。

毎年4月15日から5月6日まで行われる「北上展勝地さくらまつり」は大勢の花見客で賑わい、期間中は、北上川上空を鮮やかな鯉のぼりが泳ぎ、遊覧船が連航されるほか、満開の桜並木を馬車が走ります。

2*にわたる桜並木のほかに、展勝地公園内（293*）には約150種1万本の桜があるといわれ、4月中旬ごろに咲き始めるソメイヨシノから5月上旬のカスミザクラまで美しさを競います。

豊かな樹木と景観に恵まれた展勝地は、春の桜やツツジから秋の紅葉、冬には北上川に白鳥が飛来し、四季折々の散策を楽しめます。

公園内は、みちのく民俗村、サトウハチロー記念館など見どころが多く、歩けば歩くほどその魅力に気づかされる。北上の観光の拠点となっています。

（表紙写真は桜並木）

問い合わせ先 北上市商業観光課
（写真提供 北上市商業観光課）
（01977・728241）

表紙
東北有数の桜の名所・展勝地

選挙と地域づくり

佐賀県知事 ● 山口祥義



1月11日投票の佐賀県知事選挙で当選し、この職に就いて約3カ月が過ぎようとしています。出馬を決めてから投票日まで、わずか30日間で、地元では「奇跡の30日」などと言われています。政治活動や選挙運動は初めての経験でしたので、ただひたすら愚直に真っ直ぐに訴えていただけなのですが、今、改めて客観的に考えてみると、困難の連続の長い道のりだったように思えます。

多くの皆様の強い要請を受け、私が出馬を決意したのは、昨年12月12日の夜です。その日までの私は、自分が出馬するとは思っておらず、官民交流で派遣された民間人として、ただひたすら地域づくりの現場にいるか、2019ラグビーワールドカップ開催の支援を行っていました。それまでの総務省過疎対策室長などの経験を活かしながら、地域活性化伝道師として農山漁村や中山間地で地域振興や観光振興のお手伝いをしていたのでした。

出馬会見から告示日までの9日間で県内あいさつ回りをしたのですが、当然ですが知名度ゼロの状況に茫然としました。やはり無謀なチャレンジだったのかと考えました。しかし、地域づくりで、まずはスタートすることだと説いていたことを思い出し、先のことは考えず一歩前進することにしました。そして、どのように私を知っていたかとかと考えた時に、思いついたのが地域づくりの考え方でした。自分の思いをしっかりと目の前の方に伝え、仲間を増やして、皆で前に向かってチャレンジしていく。

12月25日の出陣式では「一つの灯を掲げて、一隅を照らす」安岡正篤先生のお言葉を叫んでいました。自分が発光体になって想いを伝えようと思えば、それに感銘を受けた人がまた発光体となって次の人につなぐ。1人の想いが2人、そして4人、8人、最後は佐賀の満天を輝かせたいと訴えました。すべては人の想い。これが伝わっ

て前に進めるかどうか。私は、人づくりに多くの力を注いできた肥前の人の想いの強さに賭けていたのです。私の事務所に来られる人が、日に日に増えていきました。特に、ネクタイを締めた人というより、近所の「おばさん」が集まってきたように思います。そして、お年寄りから若い人まで、男性も女性も前を向いて一団となっていくように思います。

選挙を終えて、多くの輪の中で聞かれる話「楽しかったね。でも、もったいなか。次は、他のことで集まらんね」。私は、地域づくりを楽しんでいる輪の中にある錯覚すら感じました。県外の多くの人たちも様々な形で参加しました。そして、そこから多くの交流、集いが生まれ、地域を創っていく、輝かせていく動きが生まれだしています。何かの目標に向けて、人と人が一緒になって頑張る。途中、失敗もあるけれども、皆の連携の力で前へと進む。この意味で、選挙も、地域づくりの一つの手法なのかもしれない。そして、ノーサイドの瞬間から、皆が将来に向けて歩き出しました。

これから佐賀県も地方創生に向けて、頑張っていきたいと思います。これから、素晴らしい中山間地、離島、県境の集落などにも、発光体になっていただきたい。むしろ、コミュニティのしつかりしたこうした地域だからこそ、これから輝ける可能性が高い気がします。我が国の大切なものを多く残しているからです。今後、多くの芽が出るように、地域集落が主役の地方創生を、交流を通して実現してまいりたいと考えているところです。

こんな本物が多く息づく、人が輝き、人と人が美しい絆で結ばれているコミュニティが充実した佐賀県に、IターンUターン、地域おこし協力隊でも域学連携でも歓迎です。全国の皆さん、佐賀の輪に入って一緒に楽しませませんか。

青少年の芸術文化活動の拠点づくり



次世代のファッション界を担う人材を育成する「ファッション甲子園」。昨年の開会式でステージに並ぶ参加校
● 青森県弘前市 (p10-11)



笑顔で撮影する高校生。「写真甲子園」は北海道東川町などを舞台に毎年行われ、昨年21回目を迎えた
● 北海道東川町 (p 8- 9)



「フラガールズ甲子園」で演舞する高校生ら。オリジナルなフラ文化の確立をめざす大会となっている
● 福島県いわき市 (p14-15)



デザイン選手権2014優勝校の伊東高等学校城ヶ崎分校。世界一周と雑巾がけを組み合わせた独創性が評価された
● 山形県山形市 (p12-13)



全国の中学校美術部の作品展「アートクラブグランプリ in SAKAI」。中学生の力作が全国から寄せられる
● 大阪府堺市 (p18-19)



「はなが甲子園」。優勝チームには文部科学大臣賞と副賞として佐渡の特産、無名異焼の大桶が贈られる
● 新潟県佐渡市 (p16-17)



第11回全国小学生倉敷王将戦の様子。大山名人誕生の地で子どもたちが毎年、熱戦を繰り広げる
● 岡山県倉敷市 (p22-23)



いけばなの公開コンクール「Ikenobo 花の甲子園」。昨年の全国大会の様子
● 京都府京都市 (p20-21)



俳句甲子園で優勝し、喜ぶ高校生ら。同甲子園は今や参加チームが110を超え、地方予選を開催するまでに規模が拡大している
● 愛媛県松山市 (p26-27)



安芸高田市で毎年開催される「神楽の甲子園」。全国の神楽好きの高校生が伝統の舞を披露する
● 広島県安芸高田市 (p24-25)



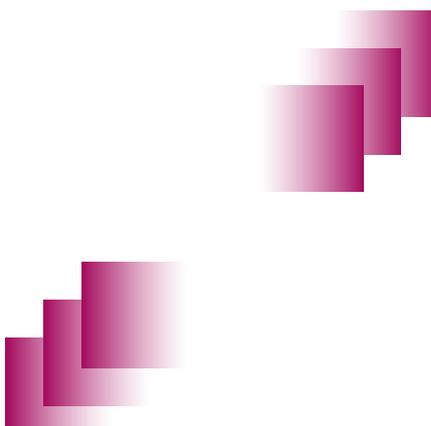
高知の夏の風物詩、「まんが甲子園」。まんがサークル日本一を目指して高校生が熱い闘いを繰り広げる
● 高知県 (p30-31)



昨年の書道パフォーマンス甲子園で優勝した愛媛県立三島高校の演技。力強い動きと筆使いが高く評価された
● 愛媛県四国中央市 (p28-29)



昨年の「こども落語全国大会」で小学生の部を制した「ほおづき亭ばある」さん(大阪市)はこども落語界きっての実力者だ
● 宮崎県日向市 (p32-33)



青少年の創造性を汲み上げる拠点づくり



公益社団法人企業メセナ協議会専務理事

● 加藤 種男

芸術文化との出会い

初めて生のオーケストラの演奏に接した時の驚きは、今でも鮮明に覚えている。戦後間もなく生まれた筆者が子どものころ普通に聴く音楽は、ラジオから流れ出る歌謡曲が中心だった。たまたま父がクラシック音楽を愛好しており、手回しの蓄音機によってレコードを聴いていた。当時のレコードは、ごく簡単に割れてしまうし、かびが生えやすく、扱いが極めて厄介なもので、子どもが触れるのは禁じられていた。したがって、ほとんがちは、父の横でかしまって聴いたものだ。当時のレコードの録音時間は片面わずかに5分程度で、シンフォニーなどは、楽章の途中でも切れるため、何度もレコードを取り換えて聴かなければならなかった。だからチャイコフスキーのバイオリン協奏曲を繰り返し聴くと、その曲がどこで切れて、どこでレコードを取り換えなければならな

いか、解るようになってくる。

ところが、10代の初めころ、おそらく日本フィルの演奏だったと記憶しているが、前橋汀子さんのバイオリンソロで、このチャイコフスキーが町の公会堂で演奏された。初めて聴いた生のオーケストラだったが、驚いたことにレコードと違って、曲は切れ目なく続いて行くのである。しかも、特にチェロの音などレコードでは明瞭に聞こえなかったものが、一種風の唸りの様に和音を奏でていたのが聞こえるではないか。主としてチェロとコントラバスが低音の支えをして、その上に様々な楽器がメロディーを演奏していることが、耳に鮮やかに響いてきた。この感動は忘れ難いものであった。

しかし、一方では筆者はついに絵を描くことを好きになれず、青少年期いつも美術にはコンプレックスを抱いてきた。あのように美しい木々や川があるのに、それをどうして下手な絵に写生しなければならぬのか、理解できなかったのである。

すなわち、青少年のための芸術文化活動の拠点をづくり、出来るだけ子供のころから、芸術文化に接することができれば、その後の人生は豊かにもなるが、そうでない場合もあるということだ。

少子高齢化の中で

現代社会には数多くの課題があるが、なかでも

筆者プロフィール

加藤 種男氏
(かとう・たねお)

アサヒグループ芸術文化財団事務局
局長、横浜市芸術文化振興財団専務理事などを経て、2012年から現職。
「アサヒ・アートフェスティバル」等を立案。現在、さいたまトリエンナーレ総合アドバイザーなど。芸術選奨文部科学大臣賞受賞。



ダンスで理科 (NPO 法人「子どもとアーティストの出会い」) の活動風景)

大きいのは圧倒的な少子高齢社会の到来であろう。青少年の激減、すなわち、ほとんど子どもいない社会が生まれている。これは特に過疎や限界集落で顕著に見られるが、都市部においてもいよいよ顕在化しつつある。

過疎地においては、豊かな自然と濃密な人間関係が残された宝物であった。しかし、若者が地方から大都会へと流出していく。何とか彼らを引き留め、あるいは一度は都会に出たとしても、また再びこの地へと帰って来てほしい、さらには、外部からの移住でもいい、子育て世代の減少を食い止めたい。これが、地方の切実な願いである。そ

のために、利便性を追求し、実に様々な開発投資を繰り返してきたが、結局は、ときどきの観光客の浮沈はあつたけれども、ついに人口減少、特に子育て世代の減少は食い止めなかった。

最後の頼みは、青少年の芸術文化活動の拠点づくりである。いくつかの地域がある程度の成功を収めている。しかし、まだまだ試行錯誤が続く。青少年にとって本当に意味のあることは何かを考えず、大人の都合だけで施策を進めても、成功は保証されない。何が課題で、何が可能性を開くのか。

芸術文化を子どもに届けるといふ観点

多くの切実な考え方は、こうだ。できるだけ子どものうちから芸術文化に接する機会を持つことが、子どもたちの未来にとって重要で、地域の魅力づくりにもなる。地方では、どうしても芸術文化に触れる機会が少ないので、これを何とかしたい。つまり、芸術文化へのアクセスが難しい子どもたちに、芸術文化を届けようというのである。

確かに、芸術文化をこれまでのようにハイカルチャーに限定して捉えると、あたかも多くの青少年が芸術文化から疎外されているように見えるかもしれない。しかし、芸術文化の領域をできるだけ拡大し、ファッション、デザイン、ダンス、マンガなどまで含めれば、彼らは本当に、芸術文化から疎外されていると言えるだろうか。レコードしか存在しない時代とは違い、多様なメディアの発達により、子どもたちは毎日自分の愛好する音

楽にも様々な映像にも接しており、なぜ改めて青少年のために芸術文化の拠点づくりが必要なのだろうか。彼らは芸術文化から疎外されているのではなく、ハイカルチャーに違和感を持ち、これを彼らの方で拒否しているのではないだろうか。

しかも、この傾向は世界的に見られることで、多くの関係者の涙ぐましい努力にもかかわらず、クラシック音楽発生の西欧においてさえ、オーケストラの観客はひたすら高齢化しており、いくつもの楽団が合併などで消滅している。若者が求めている芸術文化は、老人が求めるものとは、全く違ってしまっているのだ。芸術文化を巡る、この世代間断絶がここまであからさまになったのが現代であり、これが、今日の大きな課題なのである。

それでも確かに疎外されている子どもたちが存在する。貧困、育児放棄、虐待などの理由によって、今でもいかなる芸術文化からも疎外されている青少年が存在する。その応接に力を尽くしている人々、団体がいくつも存在する。NPO法人の「芸術家と子どもたち (ASIAS)」や「子どもとアーティストの出会い」のような優れた活動がある。海外でも多くの組織があり、例えば、パリにある「文化と多様性財団 (Fondation Culture & Diversite)」という企業財団が、芸術教育の機会均等に熱心に取り組んでいる。

しかし、そうした先駆的な事例に共通していることは、青少年を一方的に教えるのではなく、青少年の創造性を引き出すことに努めている点である。例えば、フィンランドのヘルシンキ市が設置している青少年のための芸術文化拠